6．平成16年度10年経験者研修に関する アンケート調査分析

―研修教員と大学教員に対するアンケート調査の結果とその分析―

岐阜大学教育学部研修計画委員会　山田雅博
尾高広昭

1．はじめに

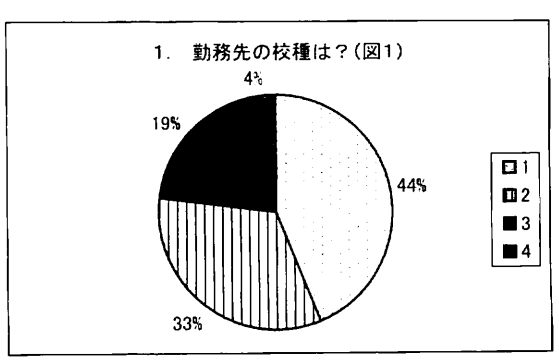
岐阜大学教育学部で行われている現職教員対象の10年経験者研修を，研修教員と大学教員双方にとってより有益なものとするため，研修終了後に双方に対して無記名アンケート調査を行った。ここでは，その調査結果とその分析について述べる。なお，研修教員の回答者は253人，大学教員の回答者は65名であった。

研修教員に対する質問項目は，(1) ～ (11) までの11項目である。(1) ～ (10) までの質問項目は，当てはまる番号を１つ選んで回答してもらう選択式であり，(11) は記述式で自由に意見を書いてもらうこととした。また，大学教員に対する質問項目は，(1) ～ (9) までの９項目である。質問項目 (1) ～ (4) 及び(6) ～ (8) は，当てはまる番号を1つ選んで回答してもらう選択式であり，質問項目 (5) と(9) は自由記述式である。

以下，２節において研修教員に対する選択式の質問内容とその結果を述べ，３節において研修教員に対する記述式の質問に関する意見を列挙する。また，４節では，大学教員に対する選択式の質問内容とその結果を述べ，研修教員の結果との比較を行う。５節において大学教員に対する記述式の質問に関する意見を列挙する。

2．研修教員に対する選択式の質問内容とその結果

以下では，選択式 (1) ～ (10) の各質問ごとに，質問内容，選択肢，回答結果を示す図を示してある。なお，質問内容によって項目を分類し，【校種・研修コース】についてが(1) および(2) の項目，【大学研修に対する期待・ニーズ】についてが(3)，【大学研修における成果】についてが(4) および(5)，【大学研修の方法】についてが(6) および(7)，【大学の印象】についてが(8)，(9)，および(10) となっている。以下，質問番号の順に述べていく。



【校種・研修コース】

(1) 勤務先の校種をお答え下さい。

1．小学校

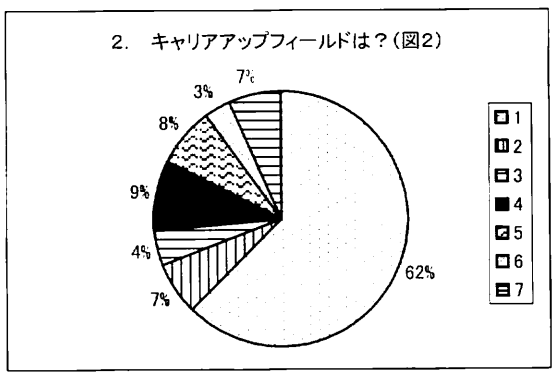
2．中学校

3. 高等学校
4. 特殊教育諸学校

最初の質問である(1) は，勤務先の校種であり，これについては図1を参照して頂きたい。

(2) 研修を受けたキャリアアップフィールドをお答え下さい。

1. 教科教育
2. 特殊教育
3. 教育相談
4. 総合的学習
5. 児童生徒の発達理解
6. 学校改善
7. 学級経営・実践研究法

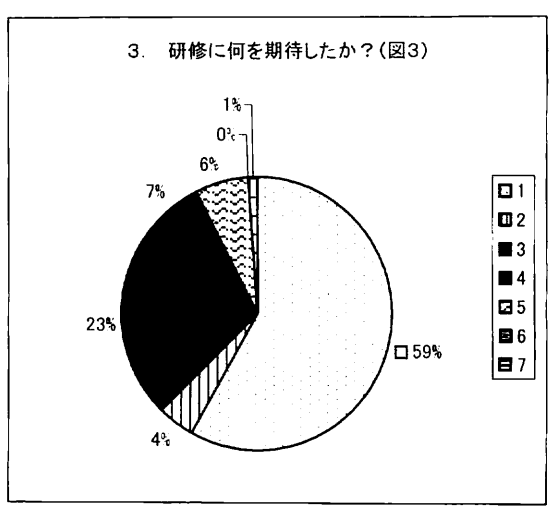


まず，研修教員の意識について分析する。質問 (2) では，キャリアアップフィールドを尋ねたが，図2によれば62%の教員が教科教育を受けたと答えている。次いで，9%が総合的学習であり，教科教育を受けた教員の割合が非常に大きい。このような結果となった要因は，教科教育が多数開設されていたということだけでなく，もともとの研修教員の希望が反映されたのではないかと考えられる。

【大学研修に対する期待・ニーズ】

(3) 今回の研修に対して，どのようなことを期待しましたか？

1. 授業の力量を高めたい
2. 学校づくり・学級経営を考えたい
3. 学問的知識を高めたい
4. 学校の直面する問題に対応できる考え方を身に付けたい
5. 様々な児童生徒の理解
6. 特に何も期待していなかった
7. その他

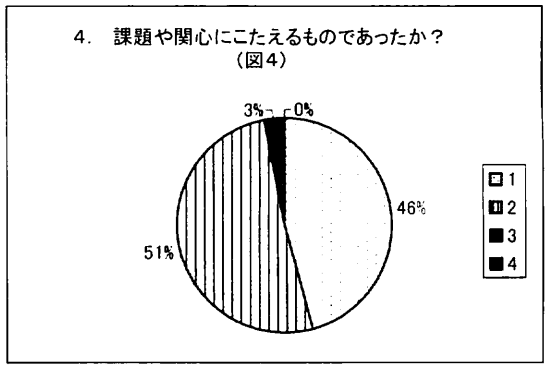


今回の研修に対してどのようなことを期待したかという質問 (3) について，回答結果である図3を見ると，授業の力量を高めたいという回答が59%と最多であり，次いで学問的知識を高めたいという回答が23%と続いていることが分かる。これらのことから，研修教員の多くは，自分の学問的知識を高め，より高い見地から日頃の授業を行いたいと考えているのではないかと推察される。このような研修教員のニーズに応えられるのはやはり大学であり，岐阜大学教育学部として，これらのニーズにより一層応えていくことが求められているのではないだろうか。

【大学研修における成果】

(4) 今回の研修は，自分の課題や関心にこたえるものでしたか？

1. とてもそう思う
2. そう思う
3. あまりそう思わない
4. 全くそう思わない



次に大学での研修における成果について分析する。図4は，今回の研修が自分の課題や関心にこたえるものであったか，という質問 (4) に対する結果を表している。図4を見ると，46%の研修教員が，とてもそう思うと答えている。では，研修教員の課題や関心とは何かということを考えると，図3より，授業の力量を高めたいという意識に行き着くのではないだろうか。すなわち，質問 (4) に対して，とてもそう思うと答えた研修教員は，今回の研修が授業の力量を高めることに非常に役立ったと実感した教員であったと考えられる。

(5) 今回の研修で，現場に直接つなげられる成果を得たと思いましたか？

1. とてもそう思う
2. そう思う
3. あまりそう思わない
4. 全くそう思わない

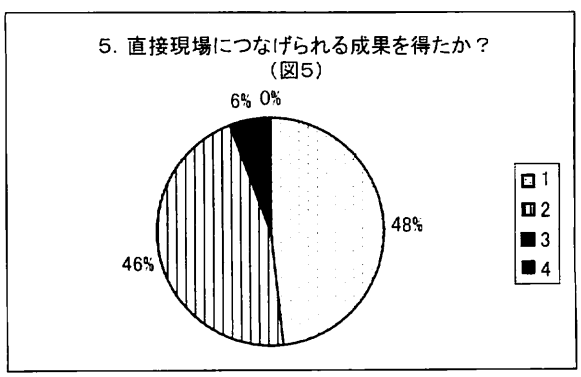
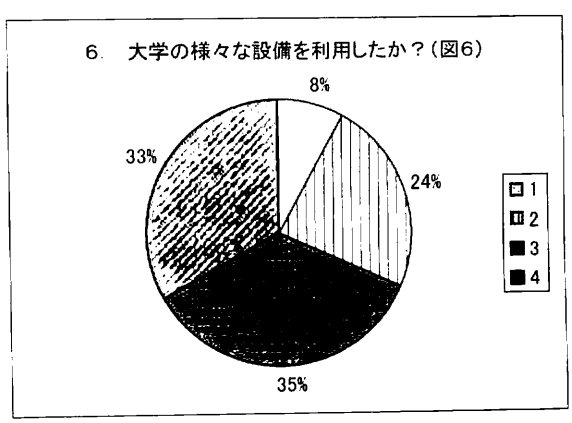


図4と図5の形がほぼ同じとなっている。質問 (4) 及び(5) に対して，ともにほぼ半数の研修教員が，とてもそう思うと答えているが，このとてもそう思うという層をより拡げていくことが今後の我々の課題ではないだろうか。

【大学研修の方法】

(6) 大学の設備・施設（附属図書館，ブラックボード，AIMS-GIFU など）を利用しましたか？

1. 良く利用した
2. 時々利用した
3. あまり利用しなかった
4. 全く利用しなかった

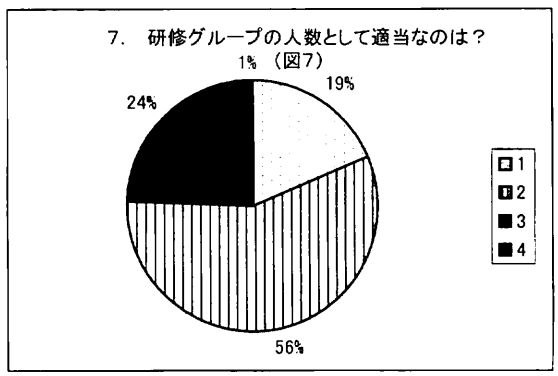


大学研修の方法について検証する。まず，大学の設備・施設を利用したかという質問 (6) について，図6によれば，あまり利用しなかった

が最多で35%，次いで全く利用しなかったが33%である。双方を合計すると68%の研修教員が，大学の設備・施設をほとんど利用していないことになる。記述式の質問（11）に対する回答意見として，大学教員と対面して指導を受けることの良さが多く書かれている。また，時間的に都合がつかない場合の双方向のやりとりとしては，電子メールで十分な場合も多いようである。

(7) 研修を受けるグループの人数は，どのくらいが適当だと思いますか？

1. 1～3人
2. 4～6人
3. 7～9人
4. 10人以上

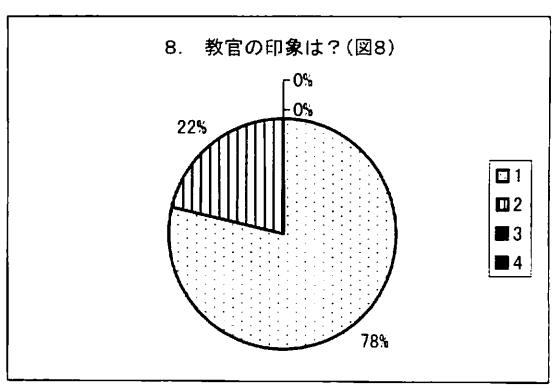


次に，研修を受けるグループの人数として適当と思われるのは何名くらいかという質問（7）に対して，図7を見ると56%の研修教員が4～6人と答えており，この回答が最多である。グループの人数については，研修計画委員会でも議論の対象となったが，研修教員の配属希望を優先させると配属人数が増える。しかし，研修教員の多くが少人数による研修を希望しており，このジレンマをどう解消していくかが今後の課題であろう。

【大学の印象】

(8) 今回の研修を通して，大学教員に対する印象はどうでしたか？

1. 非常に良い
2. まあまあである
3. あまり良くない
4. 全く良くない

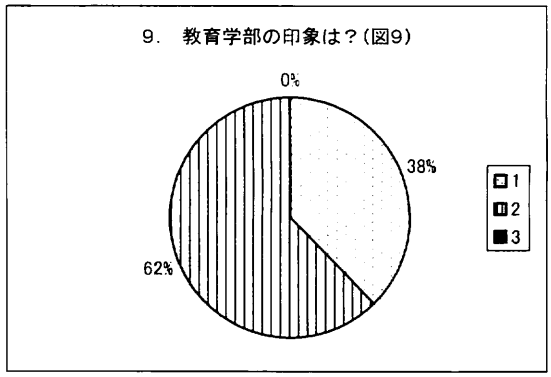


大学の印象について分析する。今回の研修を通して，大学教員に対する印象はどうでしたかという質問（8）に対して，図8を見ると，78%の研修教員が非常に良いと答えている。しかし，22%の研修教員がまあまあであると答えており，この22%の層を出来るだけ非常に良いという回答に変えていく努力が，大学教員に求められるであろう。

(9) 今回の研修を通して，教育学部に対する印象は変わりましたか？

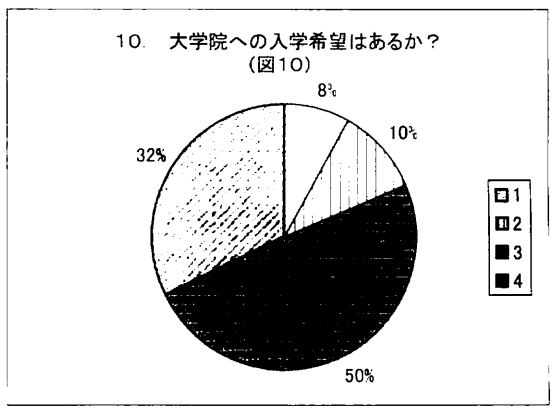
1. 良くなった
2. 変わらない
3. 悪くなった

次に，今回の研修を通して，教育学部に対する印象は変わったかという質問（9）に対して，図9を見ると変わらないが62%で最多であった。あまり，変化は感じられないようでもあるが，38%の研修教員が良くなったとも答えている。



(10) 現職教員として大学院への入学をお考えですか？

1. 入学したいと考えている
2. 今回の研修を受けて志望の気持ちが出てきた
3. 入学したいと考えているが様々な理由から難しい
4. 入学したいとは思わない



最後に，現職教員として大学院への入学を考えているかという質問（10）に対して，図10を見ると，50%の研修教員が，入学したいと考えているが様々な理由から難しいと答えている。記述式の質問（11）に対する回答意見にも多くあったのだが，勤務先の忙しさや休日における部活動に関する仕事などを考えると，そのような余裕があまりないというの実情であろう。時間的余裕を捻出する方策を真剣に考えない限り，大学院進学者は増加しないのではないか。大学院進学者を増加させ，高度な専門知識を持った教員を数多く養成するためには，様々な問題に取り組む必要があろう。具体的には，現職教員等の大学院進学者に対する理解，大学院在学者の仕事の軽減等があるのではないか。また，大学として，現職派遣教員の入学料や授業料の減免措置についても議論する必要があろう。質問（10）に対して，入学したいと考えている，研修を受けて志望の気持ちが出てきた，及び入学したいと考えているが様々な理由から難しい，という３つの回答を合わせると68%となるという現状を我々は重く受け止める必要があるのではないだろうか。

3. 研修教員に対する記述式の質問に関する意見

アンケートの最後に質問（11）として，ご意見があればお書き下さい，として自由記述による意見を求めた。ここでは，それらの意見を列挙する。なお，お礼などの意見は割愛し，今後の研修に生かせるのではないかと思われる意見を整理分類して列挙する。

【大学研修の内容に関する意見】

・講座によって内容の差があったと思います。
・もっと演習を増やして，講義ばかりじゃないようにして欲しい。
・キャリアアップフィールドにより，研修内容があまりにも異なることが気になった。

・数学の本質にせまることはできたが，現場で生かすことはできないような気がする。

【大学研修のグループ分けに関する意見】

・一人だけ音楽科じゃないので迷惑をかけました。グループ構成を考えて下さい。
・日にちを分けて，1対1の方がよいのでは。
・どの講座に決まったかの連絡が一切無いのが困る。

【大学研修の実施時期や期間に関する意見】

・飛騨は夏休み終了が早いため，全て夏休み中が良い。
・夏休み中に研修が終わるようにして欲しい(複数)。
・日程として8月の終わりは新学期の準備もありきつい，もっと早めが良いのでは(複数)。
・実施日が早めに分かるようにして欲しい(複数)。
・5日間では短いと思う。

【大学研修のサポート体制に関する意見】

・校内の詳しい案内図がなかったため，迷った。もう少し詳しい説明や案合図を。
・岐阜大学に始めて行ったので，とても迷いました。構内の案内板や，ガイダンス時の説明があるとよい。
・講座内容の説明がわかり辛い。
・5日間ありましたが，中3日間をどのように研修すればよいか不安でした。
・研修を行う上で財政的な補助があるのかないのか明確な紹介がなかった。
・研修のためのホームページがあまり整備されていない。

【大学のあり方に関する意見】

・研修後も直接相談できる機関になって欲しい。
・日頃から，教員のパワーアップ研修など，もっと大学を利用させて欲しい(複数)。
・岐阜県の教員は，岐阜大の図書館をいつでも自由に利用できる制度が欲しい。
・この研修で終わることなく，今後もメールなどで勉強を続けさせて欲しい。

【大学院などに関する意見】

・大学院に入学したいと考えているが，子育て，土日は部活に縛られ現在の状況では難しい。
・一度，学校現場で勤めてから大学で学ぶ方がプラスになる。

【その他】

・小，中，高の教員と交流できて良かった，通常そのような機会は殆ど無いので(複数)。
・大学にある新しい情報・技術をもう少し詳しく勉強したい。

4. 大学教員に対する選択式の質問内容とその結果，及び研修教員の結果との比較

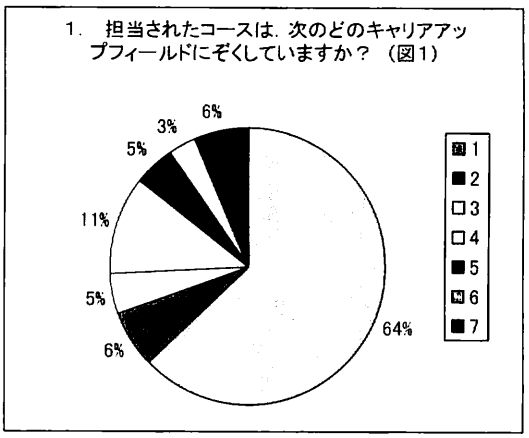
以下では，選択式の質問項目（1）～（4）及び(6）～（8）の各質問ごとに，質問内容，選択

肢．回答結果を示す円グラフを示してある。なお，質問内容によって項目を分類し，【研修コース】が(1)，【大学研修のねらい】が(2)，【大学研修の成果】が(3)，(4) および(5)，【大学研修の方法】が(6) および(7)，【研修教員の印象】が(8)，【研修全体】が(9) となっている。

【研修コース】

(1) 担当されたキャリアアップフィールドをお答え下さい。

1. 教科教育
2. 特殊教育
3. 教育相談
4. 総合的学習
5. 児童生徒の発達理解
6. 学校改善
7. 学級経営・実践研究法



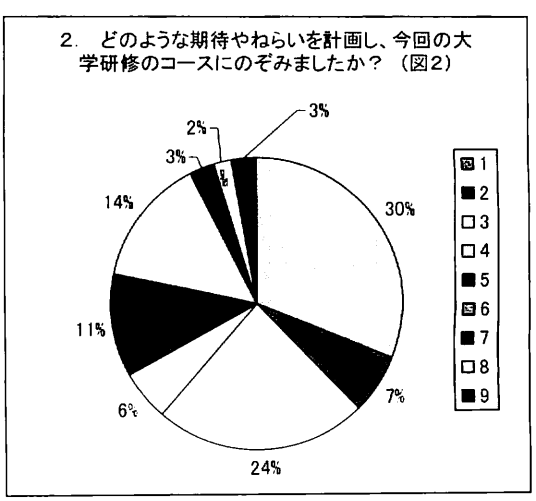
質問 (1) の「担当したキャリアアップフィールド」に対する回答結果を図1に示す。この結果より，64%の大学教員が教科教育を担当されたと回答している。次いで，11%が総合的学習であり，教科教育を担当した大学教員の割合が高いことがわかる。

この結果の要因は，第一に研修教員の要望を考慮したため，第二に大学教員が12年目の現職教員に必要なキャリアアップフィールドを教科教育と判断したことが考えられる。

【大学研修のねらい】

(2) どのような期待やねらいを計画し，今回の大学研修のコース担当にのぞみましたか？

1. 専門的知識や情報を獲得させる
2. 子どもへの関わり合いを深める授業の力量形成
3. 教科の教材研究
4. 変わりつつある児童生徒に対応できる考え方の養成
5. 経験を積んだ教師のスタンスを問い直す契機
6. 教育現場の様々な課題を解決
7. 学校づくりや学校経営
8. 大学院志望の動機付け
9. その他



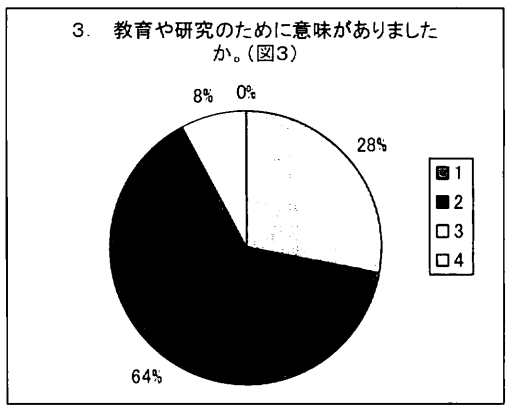
質問 (2) に関する，「大学教員の研修のねらい」に対する回答結果を図2に示す。これより，大学教員は研修のねらいを第一に30%が専門的知識を獲得させ，新しい情報を知らせること，第二に24%が教科の教材研究を挙げていた。この結果と現職教員の結果より，大学教員と現職教員の期待やねらいはほぼ一致していることがわかる。

すなわち，大学教員と現職教員はともに学校教育の現場で活用できる知識や情報の獲得，教師としての力量形成を大学研修の目標としていたことがわかった。

【大学研修の成果】

(3) 研修教員とのかかわりのなかで，教育や研究のために意味がありましたか？

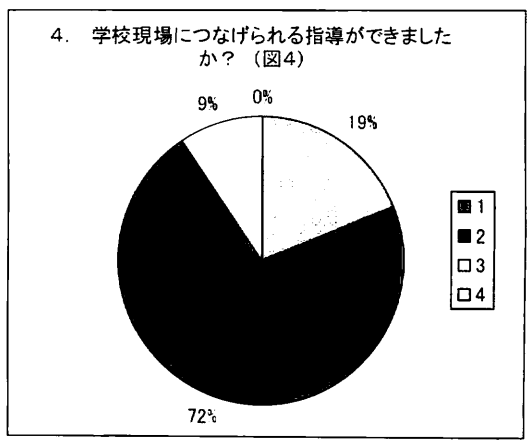
1. とてもそう思う
2. そう思う
3. あまりそう思わない
4. 全くそう思わない



質問 (3) の「大学研修の担当による教育や研究への意味」に対する回答結果を図3に示す。この結果から，28%がとてもそう思う，64%がそう思うと回答しており，全回答者の92%が「とてもそう思う」「そう思う」と大学研修の意義（教育や研究の意味）を評価していることがわかった。なお，「全くそう思わない」の回答は0％であった。

(4) 大学教員に対して，学校現場に直接つなげられる指導ができましたか？

1. とてもそう思う
2. そう思う
3. あまりそう思わない
4. 全くそう思わない



質問 (4) の「学校現場につなげられる指導ができたか」に対する回答結果を図4に示す。指導ができたかに関しては，回答結果の19%が「とてもそう思う」，72%が「そう思う」と回答した。

研修教員の回答結果と比較すると，「とてもそう思う」と回答したのは，指導した大学教員は19%，研修教員はほぼ半数であった。この結果より，大学教員は自分の指導に関して厳しい自己評価をしていることがわかる。

ただし，学校現場につなげられる指導ができたについて「とてもそう思う」「そう思う」と回答した，大学教員と研修教員はともに90%以上であった。

（なお，質問 (5) は大学教員の記述式回答のため，次節に整理分類して列挙した。）

【大学研修の方法】

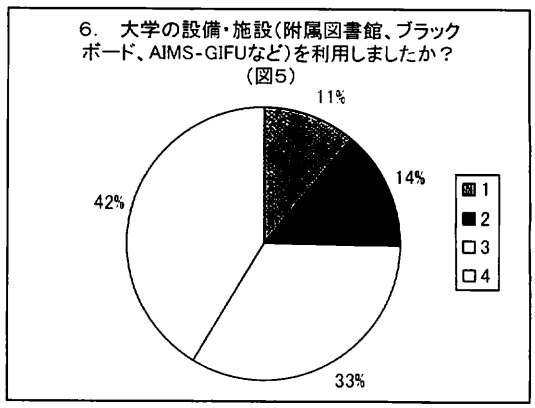
(6) 大学の設備・施設（附属図書館，ブラックボード，AIMS-GIFU など）を利用しましたか？

1. 良く利用した
2. 時々利用した
3. あまり利用しなかった

4. 全く利用しなかった

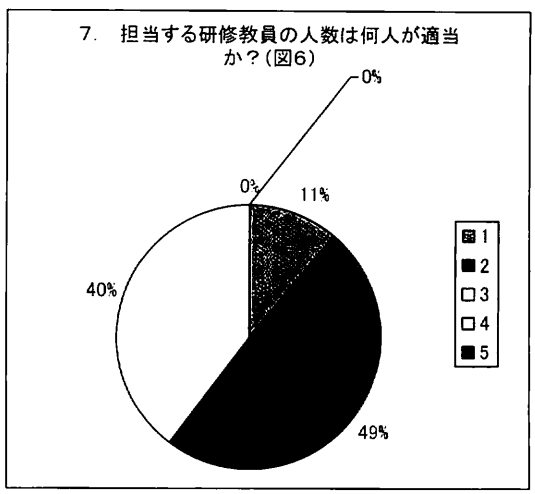
質問（6）の「大学の設備・施設を利用したか」に対する回答結果を図５に示す。その結果，あまり利用しなかったが最多で42%，次いで全く利用しなかったが33%である。これらの双方を合計すると75%の研修教員が，大学の施設・設備をほとんど利用していないことになる。

今後，大学の充実した施設・設備の利用に関して，具体的な有効活用の対策を練る必要がある。



(7) 担当する研修教員の人数は，どのくらいが適当だと思いますか？

1. 1～3人
2. 4～6人
3. 7～9人
4. 10人以上
5. その他



質問（7）の「担当する研修教員の人数として適当と思われるのは何人くらいか」に対する回答結果を図６に示す。この結果より，49%の大学教員が担当する研修教員の適当な人数を４～６人と答えており，この回答が最多である。一方，10人以上の研修教員が適当を選択した大学教員は０%であった。

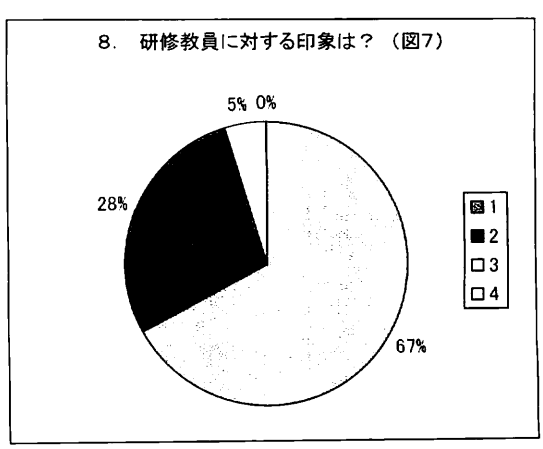
大学教員および研修教員ともに，希望する研修教員数を４～６人と回答し両者の希望が一致した。すなわち，大学教員と研修教員の両者が少人数指導を希望していることがわかった。

今後の課題点として，研修の効果を高めるための研修教員の最適な配属人数（配属教員数）の調整を挙げたい。

【研修教員の印象】

(8) 今回の研修を通して，研修教員に対する印象はどうでしたか？

1. 非常に良い
2. まあまあである
3. あまり良くない
4. 全く良くない



質問（8）の「研修教員の印象はどうでしたか」に対する回答結果を図７に示す。この結果から，

67%の大学教員が非常に良い，28%がまあまであると回答している。

大学教員は，研修教員の研修姿勢や熱意を良い印象で捉えていることがわかった。

5. 大学教員に対する記述式の質問に関する意見

【大学研修のコース運営に関する意見】

質問（5）として「コース運営にあたって，工夫したことや課題がありましたら，以下に記述ください」として自由記述していただいた。その結果を，以下に整理分類して列挙する。

＜コース運営における工夫＞

・実験装置や教材の製作など，実験や観察を重視した(複数)。
・できるだけ研修教員のおもいを大事にする。
・新しい知見の資料を提供することにかなりの時間が必要だった。
・明日の授業・学校に役立つ専門知識・技術の伝達を行った。
・現行の教科書・教材の事例を参照しながら教師としての専門性に関する議論を行った。
・なるべく教員各人の興味ある教材に具体的につなげられるような理論構成にした。
・AIMS を資料提供や活動支援のために最大限利用した(複数)。
・メールを使って教員同士が中間レポートを相互に送信し合い刺激を作る工夫をした。
・担当教員と研修教員が問題解決のために共に考えていく。
・期間中に実習の期日をもうけた。
・発表と参加者による会議を中心にした(複数)。
・コース参加者が5名いたので，お互いの研修課題についてアドバイス・意見交流を深めて，見方・考え方を高めるよう工夫した。
・1学期の授業実践もしくは2学期にこれから進めようとしている構想をもってもらい，それに即していっしょに考え談話することを重視した。
・中学校の数学の論理的背景，現在の教育方法で不足する点の改善，実際上の指導の問題点を，例を挙げて，考えさせた。
・すべての教員の授業を参観，個別に指導した(非常に大変だったが効果は大きかった)。

＜コース運営の課題＞

・事前準備が不足していた。事前にやることを伝える工夫をするべきだった。
・7人の研修を受け入れたが，多かったと思う。個人に十分対応するには3～4人が限度かと考える。
・一人一人のニーズに対応することについてが課題。

【大学研修に関する意見】

質問（9）として，「大学研修へのご意見があればお書きください」として自由記述していただいた。その結果を，以下に整理分類して列挙する。

＜大学研修の内容に関して＞

・現状の研修でも，担当教員と研修教員の双方にとって有益であったと思う。

・遠方から自費で参加する研修者にも価値ある情報を提供しえているかは，全く自信のないこと。

＜大学研修のグループ分けに関して＞

・あまり人数が多すぎても困るが，３名以上だと，研修教員の間で交流・意見交換ができるメリットもある。

・人数の上限設定を低くして欲しい。

・担当した教員の人数のばらつき。わざと選ばれにくいコースを設定しているという話もある。
⇒インセンティブの必要性

＜大学研修の実施時期や期間に関して＞

・今年は昨年と違い日程の調整をしなくてすんだのでよかった。

・目的よりも日程優先で選択されている。⇒初日の統一など

＜大学研修のサポート体制に関して＞

・全コースにおいてAIMSの利用。AIMSの場合，グループ全員が同じ情報をもつことができる。また，必要があれば深夜の意見交換も可能になる。

・コンピュータ室の利用カードが図書館などでも使えたら便利であったかなと思います。

＜研修のあり方に関して＞

・受身的でなく，自発的な研修態度がもっと出せる研修にしてほしい。

・いわゆる「研究後」の教員における12年目研修への対応に問題を感じた。

・前年度より研修内容が整理されたようで，研修教員の負担も減り，大学での講義に集中でき質の良い授業が保障された。

・研修の成果を一定のボリュームを持った研究論文・報告をまとめることを義務化し，当初から論文・報告をまとめるという目的意識を明確にして，研修に臨んでいただくとしてはどうでしょうか(複数)。

＜その他＞

・研修された先生方，まじめに取り組まれました。教員養成をする立場から大変参考になりました。

・研修生には教材開発等のためになにか補助金はあるのでしょうか。あればよいのですが。

・実験器具を作成する際に経費がかかる。今年度は大学の講座・研究費の教育経費で負担したが今後は教員研修に対する予算配分も検討してほしい。

・インターネットに接続できる環境を研修に来られた先生が持っていない。

6. 終わりに

10年経験者研修は，今年度で２年目である。この２年間の報告集に載せるための，研修教員と大学教員に対するアンケート調査の結果とその分析を,研修計画委員会委員長から仰せつかった。研修教員に対するアンケート調査とその結果分析は，数学教育講座の山田雅博が，大学教員に対するアンケート調査とその結果分析・比較は，技術教育講座の尾高広昭が受け持った。文章表現のまずさから，これらの分析などにご批判もあるかと思うが，今後の岐阜大学教育学部の将来を担う若手教育職員の熱い思いが込められていることを汲み取って頂き，ご容赦願いたい。